

【書評・紹介】

山田仁史・永山ゆかり・藤原潤子 編

『水雪氷のフォークロア—北の人々の伝承世界』

(東京, 勉誠出版, 2014年03月, A5判, 345頁, 3500円+税)

丹菊逸治

表紙画像

本書は書名の通り、北方諸民族の神話・口承文芸のアンソロジーである。北方諸民族も神話・口承文芸も最近では取り上げられることが少ないジャンルとなってしまった。本書は類書としては久しぶりのものであると同時に、珍しく 300 ページを越える大部である。また、「水・雪・氷」という「北の伝承」ならではのテーマを取り上げた意欲的な作品でもある。私も執筆者の一人として刊行元となった勉誠出版に感謝と敬意を表したい。

まずは目次をご紹介します。

はじめに：山田仁史

地図：本書に登場する主な民族

第一部 北のことばと語りの世界

概説：永山ゆかり

第一章 アイヌ：高橋靖以（12話。うち7話は執筆者採録による初紹介）

コラム：十勝地方のウチャシコマ

第二章 ウイルタ：山田祥子（8話。うち2話は執筆者採録による初紹介）

コラム：ウイルタのセワ

第三章 ニヴフ：丹菊逸治（9話。うち5話は執筆者採録による初紹介）

コラム：ニヴフ人と干し魚

第四章 イテリメン：小野智香子（4話）

コラム：イテリメンの祭、結婚式、タブーについて

第五章 アリュートル：永山ゆかり（10話。うち6話は執筆者採録による初紹介）

コラム：アリュートルのアザラシ祭

第六章 ユカギール：長崎郁（10話。うち4話は執筆者採録による初紹介）

コラム：フィールドで学んだ植物名称とユカギール流のお礼

第七章 サハ—民話と伝承：江畑冬生（8話。うち2話は執筆者採録による初紹介）

コラム：旅と食にまつわるサハ—人の祈り

第八章 サハ—歌謡と口琴：荏原小百合（4曲）

コラム：伝統的家屋で味わうサハ—料理

## 第二部 北の神話とフォークロア

概説：山田仁史

第九章 ロシア：藤原潤子（16話）

コラム：水のヌシに溺死体を返してもらう方法

第十章 北方の諸民族：山田仁史（17話）

コラム：雪の中、訪い来る者たち—ゲルマンと東北日本の仮面祭儀

あとがき：藤原潤子

このように北極をぐるりと取り囲む地域が対象となっており、20におよぶ諸民族の「水・雪・氷」を巡る伝承を集めてある。シベリアから極東までの諸民族の伝承をまとめた第一部、ロシアの伝承と、ヨーロッパ・北アメリカまでを視野に入れた第二部の二部構成となっている。第一部は7民族に取材した60話を越えるテキストと解説から構成されており、うち24話は現地でのフィールドワークを続けてきた執筆者陣がそれぞれ自らシベリア諸民族の言語で採録し、そこから訳出した資料である。シベリア諸言語の現状を知る方々には、その貴重さが理解していただけることと思う。

シベリア地域以外でも、アイヌ語十勝方言の資料、ウイльта語の資料は意外に紹介される機会が少なかったものである。特にウイльта民族の伝承が原文からの訳出で収録されているのは喜ばしい。ウイльта語の話者は北サハリンで健在であり、まだまだ生きている言語である。歴史的にも日本とかわりが深い民族だけに、その伝承がこの機会に少しでも一般の方々の目にふれることを願う。

それら初公開の24話以外の資料も、学術資料として刊行されただけのもの、一般には入手困難なロシア語原書からの翻訳、サハ語からの翻訳など事実上本邦初紹介に近いものが多い。これだけの数の初公開・初邦訳テキストを収録した一般向けのアンソロジー本は今後しばらく編まれることはないだろう。

表紙と挿絵・写真にも力が入っている。表紙と挿絵の一部を担当したネウストローエヴァ氏は日本在住のサハ人画家であり、彼女の描く世界はご自身の知識と経験にも裏付けされている。その他の挿絵も多くが現地のアーティストの手になるものである。写真は現地で撮影されたものが多い。

もちろん、収録されているのは伝承テキストばかりでない。各民族の基本情報や世界観、水・雪・氷にかんする現地語彙をかんたんにとまとめた解説、現地取材の合間の出来事などをつづったコラムなど、一般向けの内容も盛りだくさんとなっている。

第二部では、ロシアやヨーロッパ・北米など、いわば地球規模からみた「北の人々」のやはり「水・雪・氷」を巡る伝承資料が紹介されている。ロシアの伝承では定番といえるアフナーシェフの採録資料ばかりでなく、さまざまな資料をとりあげている。編者の一人である山田仁史氏による北欧の資料紹介も原文からの直接の訳出を含む貴重なものである。

こうして広大な北の世界の伝承を並べてみれば、同じ「北の人々」といっても地域差が大きいことに気づかれるであろう。これはどうしたことであろうか。気候が似ていて陸地がほぼつながっている地域である。ベーリング海峡は障壁ではない。海峡の兩岸の人々にはるか昔からユーラシア大陸と北米大陸を行き来してきた。北極をぐるりと巡る地域では

伝承もやすやすと伝播していく。ところが実際には必ずしも同じ話があるとは限らないし、世界観も大きく異なる。あるいはまた、同じ北といってもヨーロッパとシベリアでは「雪・氷」に対する態度も異なる。本書で山田仁史氏が述べているように「極寒のシベリアに生きる人々は、水・雪・氷についての語彙を豊富にもつ一方、氷雪におおわれる冬はむしろ標準的な状態なので、フォークロアにおける描写はさほど多くない」のである。

こういった伝承の共通性と差異は、今後もさまざまな議論を呼び起こし続けていくことだろう。第二部「北の神話とフォークロア」の冒頭に付された山田仁史氏による「概説」からは新たな研究への意気込みが伝わってくる。あえて解説を抑えて資料に語らせる体裁をとった本書だが、それだけに今後の研究の展開も待たれることだろう。

本書は類書が少ない現在では入門書としても最適と思われる。手にとっていただければ幸いである。

(たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)